優秀賞

期待と不安

土浦日本大学中等教育学校
一年　上野修司

「いつ鮭が戻ってくるのかなぁ。」

僕の住む取手市は利根川と小貝川に囲まれていて、水に囲まれた町である。通っていた小学校から、徒歩５分もかからない場所に小貝川が流れている。

小学校５年生の十二月頃、学校の授業で鮭の卵から三～四cmの稚魚になるまで水そうで育て、二月の始めには小貝川に鮭の稚魚を放流した。小貝川は、カヤックやボート遊びもできるけど、川底は見えないし、水が汚いと僕は思う。本当にこんなところで放流して、鮭は戻ってこられるのか不思議な気持ちであった。その当時の担任の先生が、僕の疑問に答えてくれた。

「小貝川の上流には『五行川』という川が流れていて、とてもきれいな水の川なんだよ。そこには毎年鮭がそ上するんだ。」

これを聞いて僕は思った。この小貝川からは五行川のきれいさが想像できない。でも、鮭は、小貝川を確実に通って戻って来ているんだと。

二〇一五年に起きた常総市の水害のことを覚えているだろうか。この時は何日も雨が降り続き、茨城県全体にも、大雨特別警報が出ていた。そう、この常総市で決壊した川は小貝川の上流。取手市も、いつ決壊してもおかしくない状態だった。

友達の家に遊びに行った時に、僕は大きな玄関らしき場所の横で立ち止まり目を見張った。すると友達のひいおじいさんが話してくれた。

「この軒先にぶら下がっている大きな木造の船はな、川が氾らんした時に避難するためのものなんだ。この辺り一帯は何度か川の氾らんで、水害にみまわれた過去がある。」

早速、家に帰って母に話すと、今住んでいる家も小貝川か利根川が氾らんしたら、水位が四mまで達して、二階まで水没してしまうことを知った。

「えーっ！逃げ場ないじゃん。」
心の中で僕は叫んだ。そうか、だから昔からある大きな家には船があるのか。うちは、二階にゴムボートでも置いておくしかないかなぁ。
二〇一五年の九月、家族とインターネットで見られる川の水位を確認していた。いつ避難するか、この辺りの雨は止んでも、栃木県が豪雨だから、まだ油断ならない。そんな不安な状態でいた時に、速報が流れた。
「茨城県常総市で鬼怒川の堤防が決壊しました。」
住宅街や田畑は、濁流に飲み込まれていた。何もかも無くなって、ヘリコプターで助けられる人々。あの光景は自分の家だったのかもしれない。そう思うとぞっとした。翌日、小貝川の横に沿った道を車で通ると、普段水かさが少ない場所も、ほぼ満タンに川の水があった。そして数カ月たった時、家が無事残っていた人も、水が引いても臭いが取れず住むことができないという事実を知った。
ここ数年は、川に捨てられたゴミを拾うボランティア清掃に参加してみたりした。水害による臭いの原因も川にたくさん捨てられているゴミが一因なのかもしれない。でも、少しでも鮭も気分が良く戻って来られるきれいな川であって欲しい思いが強い。僕にとって、身近な川（水）は、期待も大きいけれど、災害などの不安も少しある。僕が放流した稚魚は三年～五年で戻ってくるだろうから、来年からの秋から冬にかけて、弟と一緒に見に行ってみよう。鮭くん、小貝川に戻っておいで。